

「清涼飲料の歴史」 一般社団法人全国清涼飲料連合会

※問い合わせの多い内容について抜粋して記載しています

年号	主な動き (商品関連、法律の国内の動きは青、 海外はオレンジ、容器・自販機関連は 緑)	解説
紀元前	清涼飲料水のはじまり	清涼飲料水(炭酸ガスを含む飲料)は、古代ローマ時代に、天然に湧き出る鉱泉や温泉を飲用したことがはじまりだといわれています。鉱泉の水は普通の水と異なり、人体のためになり、健康の増進に役立つことを知り、まず病人に飲まれました。当時は飲用に供するため、つぼに詰めて運ばれました。
	果実飲料のはじまり	6000年以前にバビロニア人が果実の飲料を飲んだこと、以後何世紀にもわたりレモン飲料が飲まれた記録があり、果実飲料の歴史はきわめて古いのです。
	ガラスびんの誕生	約5000年前、古代メソポタミアの砂場で焚かれた火の中で偶然に溶けた岩塩と砂が混じり合い、世界初のガラスができたといわれています。
	クレオパトラが炭酸飲料をはじめて作った？！	世界で最初に炭酸含有の飲料をつくったのは、クレオパトラだという伝説があります。真珠をぶどう酒に入れると、真珠の主成分である炭酸カルシウムが酸に溶け炭酸ガスが発生します。それを美容と不老長寿の秘薬として飲んだと伝えられています。現在のシャンペンに似た飲みものであったのではないかと想像されますが、真偽のほどは定かではないものの、いかにもクレオパトラにふさわしい伝説です。
1500年頃	コルク栓のはじまり(ドイツ)	ドイツの製菓業者がはじめてコルク栓を使用したと伝承されています。
1772年	炭酸飲料の原理を発見(イギリス)	イギリス人のジョセフ・プリストリーが石灰石と硫酸との反応で得られた炭酸ガスを水に飽和させる方法を発見し、発表しました。
1776年	炭酸飲料の商業的生産のはじまり(スウェーデン)	炭酸飲料の商業的な生産はスウェーデンではじまり、ヨーロッパに広まりました。イギリス人のジョセフ・プリストリーの発見が商業的な生産に活用されたもので、当初は陶磁器製のびんに詰められていましたが、後にガラスびんに代っていきました。
1808年	炭酸飲料の誕生(アメリカ)	アメリカの薬剤師タウンゼント・スピークスマンが炭酸水を果汁で味付けしたものを売り始めました。これが現在の炭酸飲料の元祖だといわれています。
1809年 (1804年説もあります)	食品の加熱殺菌、保存技術の発明(フランス)	フランス革命後、皇帝となったナポレオンは軍用食糧の確保のために1万2000フランの懸賞金をかけて食品の新貯蔵法を募りました。パリの菓子職人のニコラ・アペールが食品をガラスびんに詰め沸騰水につけると保存できるという加熱処理方法を発明。この方法は直ちにびん詰め工業に応用され、1820年には英国を経て米国にまで広がりました。
1809年	きゅうりびんの開発(イギリス)	イギリスのウィリアム・ハミルトンが「きゅうりびん」と、それを使った製造法、および製造機械を開発。特許を出願しました。その製造法とは、炭酸飲料の炭酸が抜けないように密封するためにコルク栓だけでは、炭酸の圧力による爆発の危険性があるので、コルクの上から針金やひもで縛り、首の段差につなぎとめたもの。また底がとがり、横に寝かせて置く形は、コルクの栓が常に液に浸された状態が保て、コルク栓が乾燥・収縮してガスを逃がしてしまうことがないようにするための工夫です。
1810年	缶(食品用)の発明(イギリス)	イギリス人のピーター・デュランドが、キャニスターと呼ばれる食品用のブリキ缶による食物貯蔵法を発明しました。当時のブリキ缶は手作り。1日に60~70缶しか製造できなかったといいますが1812年には世界初の缶詰工場がイギリスに誕生しています。
1843年頃	玉入り(ラムネ)びんの誕生(イギリス)	ラムネびんの特徴でもあるビー玉で栓をする製法は、イギリスのハイラム・ゴットが発案。特許を出願し、ラムネびんの元祖といわれています。当時はヨーロッパを中心に大いに普及しました。今でも、当時の貴族の城跡からラムネびんが発掘されることがあるそうです。
1853年	日本の清涼飲料水(炭酸飲料)のはじまり	日本に初めて炭酸飲料が伝えたのは1853年、ペリー提督が艦隊を率いて浦賀に来航したとき、飲料水の一部として艦に「炭酸レモネード」を積んでおり、幕府の役人にこれを飲ませたのが、「炭酸飲料1号」だといわれています。 当時はきゅうりびん <small>1809年参考</small> に入っており、この栓をあけたところポンという大きな音がし、シューと泡が出ました。役人はびっくりして「さては新式銃か！」と思わず腰の刀に手をかけたとか。このため当時は「ポン水」や、「鉄砲水」などと呼ばれていました。 実はこれが「ラムネ」の原型で、ラムネという名称は、「レモネード」という言葉がなまったものといわれています。
1863年	清涼飲料の製造元祖	わが国での清涼飲料の製造元祖は「ノース・アンド・レー商会」と称する薬種商であるといわれています。1863年に横浜で英国人ノースレー(ノースが支配人、レーが助手)が同社を開業。1868年に横浜居留地でレモネード、ジンジャーエール、ミネラルトニック、シャンペンサイダー等の炭酸飲料の製造を始めました。 ノース・アンド・レー商会は清涼飲料製造用の機械、びん、香料、酸等の原材料の輸入商を兼ね、わが国の清涼飲料製造業の草創期に大きな役割を果たしています。
1868年	果実フレーバー飲料のはじまり	中国人蓮昌泰が東京築地でラムネ屋を開き、酒石酸(又は、クエン酸)及び砂糖を水に溶かし、レモンエッセンスを添加した製品を販売。小規模ながら日本における果実フレーバー飲料の商業生産の始まりとなりました。
1884年	ミネラルウォーターのはじまり	摂津の国平野郷で三菱鉱泉平野水のびん詰めを始め、これが国産スパークリングミネラルウォーターのはじまりだといわれています。翌年、明治屋が改めて「三ツ矢印平野水」で発売しました。横浜・神戸の居留地の外国人やホテルに提供されていたようで、文献によると、1886年には三ツ矢平野水(川西市平野)が「三ツ矢印平野水は天然炭酸水を含める東洋唯一の純良鉱泉なり」とラベルに銘記し瓶詰・販売されていました。また、1890年(明治23年)にはクリフォード・ウィルキンソンが炭酸鉱泉水(宝塚市)を販売しました。炭酸の入っていないミネラルウォーターでは、1929年創業の堀内合名会社が富士身延鉄道株式会社(現JR東海身延線)所有の山梨県下部で湧出する名水を活用して、富士ミネラルウォーターの販売を開始したのがはじまりだといわれています。 詳しくは日本ミネラルウォーター協会Q&Aへ
1887年	玉入り(ラムネ)びんを輸入	イギリスから玉入り(ラムネ)びんを輸入。
1892年	玉入り(ラムネ)びん国産化	大阪の徳永ガラス会社が製造に成功。きゅうりびんがすたれ、玉入り(ラムネ)びんが大流行しました。
1892年	王冠の誕生(アメリカ)	ウィリアム・ペインターはアメリカで王冠を発明。世界中の特許を取得してクラウンコルク社を創設し、各地に王冠工場を設立して独占的に供給しました。王冠の名前は形状が貴族が被る王冠に似ていることに由来しています。

1897年	果実飲料のはじまり	果実を原料とした果実飲料が最初に製造されたと思われるのは1897年ごろ、和歌山県有田郡広村の名古屋伝八による「ミカン水」でした。みかんを搾汁してびん詰めにし、大阪方面に出荷した記録はありますが、この製品は不幸にして殺菌不十分のため、はっ酵し事業は中止されたようです。殺菌や保存技術が整った現代から考えると、天然果汁を使用した果実飲料の製造は想像以上の困難を伴ったことと思われます。
1899年	サイダーのはじまり	横浜扇町の秋元巳之助が工業化し、「金線サイダー」の製造をはじめました。サイダーという名称は、シードル(CIDRE、フランス語でリンゴ酒の意)から出た言葉だといわれており、1905年に「三ツ矢サイダー」、1909年に「リボンシトロン」、1928年に「キリンレモン」が発売されています。
1900年	清涼飲料水営業取締規則制定	「清涼飲料水営業取締規則」の第一条に「本則において清涼飲料水と称するは、販売に供する“ラムネ”“レモナーデ”“曹達水”及びその他の炭酸飲料を謂う」とあり、この規則により清涼飲料水として定義されました。き釈しないで飲用に供することが可能となり、他方、混濁、沈濁物及び防腐剤のあるものは認められないことになりました(清涼飲料水は透明でなければならなくなりました)。なお、この法律は1947年の廃止まで継続しました。
1900年	王冠輸入	イギリスから王冠を輸入。
1903年	王冠の国産化	英国のクラウンコルク社が支店を開設。横浜に工場を建設し製造を開始。コルク栓の時代が終わり王冠の時代が到来しました。
1904年	王冠使用のサイダー登場	横浜の秋元巳之助「金線サイダー」が王冠栓で発売されました。以後、王冠のものをサイダー、玉入りのものをラムネと呼ぶようになりました。
1910年頃	輸入コーラが登場	1914年に出版された詩人・高村光太郎の処女詩集「道程」のある作品に「ココオオラ」の名前が出ており、その当時から日本にあったようです。また、1919年には輸入販売によって「コカ・コーラ」が明治屋にて販売されたことがPR誌で確認されています。 コーラ飲料の詳しくはこちら
1918年		一般社団法人全国清涼飲料工業会の前身、「全国清涼飲料水同業組合」設立
1920年	コーヒー飲料のはじまり	神奈川県守山乳業(株)がミルクコーヒーの名称で製造販売を開始。牛乳にコーヒーの味をつけ、菊型のびんに王冠打栓したもので、翌年には横浜駅構内で販売を始めました。これを契機として各地の中小企業によるミルクコーヒー製造販売の勃興となりました。しかし、当時はまだ殺菌技術が確立されておらず、長期保存できるものではありませんでした。 コーヒー飲料の詳しくはこちらから
1933年	トマトジュースのはじまり	トマトジュースのびん詰め製品がカゴメ(株)より生産・販売されました。
1938年	缶入り飲料のはじまり	横浜の浜口文二(みかん缶詰を製造していた)が、うんしゅうみかんによる果汁缶入りを試作し、5号缶(内容量318ml)300c/sをアメリカに見本輸出をしました。
1947年	食品衛生法制定	清涼飲料水の成分規格、製造基準が見直され、原料として使用された動植物またはその組成成分に起因する混濁、または沈殿は差し支えないと規定され、混濁ジュースの生産が可能となりました。1947年に制定され、1948年に施行されました。
1949年	本格的な果実飲料の到来	果汁を使用した「バヤリースオレンジ」が発売(当初は米軍基地内のみで販売)。本格的な果実飲料の先駆けとなりました。1951年からアサヒビール(現・アサヒ飲料(株))が販売を開始。1952年に「リボンジュース」、1954年に「キリンジュース」が発売されました。
1951年	ポリエチレン容器登場	1951年にポリエチレン原料が輸入され、ポリエチレン容器詰清涼飲料が業界に現れたのは1955年ごろからです。1957年、食品衛生法上の例外承認容器として認められ、1959年12月の改正により、食品衛生法上の容器として承認され、その容器の形態などが厚生省通達によって定められ現在にいたっています。 ポリエチレン容器の詳しくはこちら
1954年	缶飲料登場	明治製菓(株)(現:(株)明治)が「天然オレンジジュース」を東京限定で発売。これが、清涼飲料にワンウェイ容器が使われた最初です。それまではリターナブル容器であるガラスびんを利用し、飲み終わった後は容器をお店などに返却するのが一般的でした。
1955年		社団法人全国清涼飲料工業会設立
1956年	カップ式ストレート用の自販機登場	星崎電気(株)がカップ式ストレート用の自動販売機を開発。国産第一号。
1957年	コーラ登場	「コーラ」は日本での製造販売が1952年からはじまり、外貨規制などのため当初は限られた場所での販売でした。1956年に原液の輸入に関する許可があり、1957年に「コカ・コーラ」が発売されました。1961年から完全自由化され、一般に市販されるようになりました。「ペプシコーラ」は1959年に発売されています。 コーラ飲料の詳しくはこちらから
1961年	噴水型自販機登場	「オアシス」の名で知られる画期的な噴水型のジュース自販機を発売。爆発的なヒットになりました。
1962年	びん自販機登場	国産びん自販機が発売されました。
1965年	炭酸栄養ドリンクのはじまり	大塚製薬(株)が初の炭酸栄養ドリンク「オロナミンC」発売しました。
1967年	缶自販機登場	缶自販機が導入されました。
1968年	紙容器のはじまり	食品衛生法に基づく規格・基準の改正により紙容器の使用が認められました。一般的に市場に出回ったのは1971年ごろからのようです。
1967年	缶のプルトップ登場	缶飲料のプルトップが開発され、第一弾の炭酸飲料が登場(それ以前の缶飲料は缶切りなどで注ぎ口を開けていました)。
1969年	缶入りコーヒーのはじまり	缶入りコーヒー飲料として市場に広まったのはUCC上島珈琲(株)が発売した缶入りコーヒー飲料が、翌年の大阪万国博覧会で大人気となったのがきっかけだといわれています。その後、(株)ポッカコーポレーション、ダイドー(株)などから相次いで製造販売され、さらに1975年には日本コカ・コーラ(株)がジョージアブランドで参入して以来、ビール会社、食品会社等の大手企業製品が続々と発売されました。 コーヒー飲料の詳しくはこちらから
1973年	紅茶飲料のはじまり	缶入りの紅茶飲料は1973年に(株)ポッカコーポレーションから発売されました。 紅茶飲料の詳しくはこちら

1973年	ホットorコールド自販機登場	冷却と加熱の切り替えが可能な、ホットorコールド式缶飲料自動販売機が世界初、(株)ポッカコーポレーションによって導入されました。翌年には一台の自販機で温かい飲料と冷たい飲料が同時に販売できる「ホット&コールド缶飲料自販機」が誕生しました。
1980年	スポーツドリンクのはじまり	大塚製薬(株)から「ポカリスエット」が発売されました。 スポーツドリンクの詳しくはこちら
1980年	ウーロン茶飲料のはじまり	缶入りウーロン茶を(株)伊藤園が80年9月に、翌年12月にサントリー(株)から発売されました。 ウーロン茶飲料の詳しくはこちら
1982年	PETボトル登場	1982年2月、食品衛生法に基づく容器包装の規格基準の改正によって、PETボトルを使用した炭酸飲料、果実飲料の製造販売が始まりました。PETはポリエチレンテレフタレート(PET)の略で、散乱ごみに対する懸念から、業界ではおおむね1リットル未満の小型サイズは使用を自粛していました。 PETボトルの詳しくはこちら
1985年	緑茶飲料のはじまり	(株)伊藤園が缶入り緑茶を発売しました。 緑茶飲料の詳しくはこちら
1990年頃	ステイ・オン・タブの登場	1990年頃から、プルトップのタブの投げ捨てによる、ごみの散乱が社会問題となり、SOT(ステイ・オン・タブ)蓋(タブを引き起こしてから戻すと飲み口が開き、タブ自体が缶体からはずれない構造になっている蓋のこと)に切り替わりました。現在は、ほとんど全ての飲料缶でSOT蓋が採用されています。
1991年	自販機の消費電力量削減への取り組み開始	地球温暖化防止策として自販機の消費電力量削減の取り組みを開始しました。
1992年	自販機110円に値上げ	過去10年続いていた自販機の缶商品などの販売価格が、100円を110円に価格改定しました。89年に消費税3%が導入された際に、物品税が廃止され物品税が課せられていた炭酸飲料やスポーツドリンクなどは免税分で消費税が相殺されたものの、物品税が免除されたいたJAS品の果実飲料や、コーヒー飲料、茶系飲料などは実質、値下げして企業努力で吸収したものの、それでは対応できなくなり、販売価格に転嫁しました。
1993年	ブレンド茶飲料のはじまり	アサヒビール(株)(現アサヒ飲料(株))から業界初めて16種類の原料をブレンドした「アサヒ十六茶 缶340g」が発売されました。 ブレンド茶飲料の詳しくはこちら
1995年	賞味期限表示に変更	食品の製造年月日表示から賞味期限表示に1995年から変わりました。製造技術の向上により商品の品質が安定的に保持できるようになり、製造年月日表示から賞味期限表示になりました。
1995年	自販機でピークカット機能を導入	電力会社との共同プロジェクトとして電気需要の高まる夏の午後1時～4時までの間、冷却運転を停止するピークカット機能(エコ・ベンダー機能)を開発し、普及をはじめました(現在では、ほぼこの自販機です)。
1996年	国産小型PETボトル登場	小型PETボトル(500ml)飲料が登場したのは1996年です。清涼飲料業界は、消費者ニーズにこたえて500mlサイズのPETボトルを導入しました。
1997年	容器包装リサイクル法の施行	容器包装リサイクル法が施行され、消費者と市町村と事業者が役割を分担して、PETボトルやガラスびんなどの容器包装の分別収集・リサイクルに取り組むことが義務づけられました。
1998年	自販機120円に値上げ	97年に消費税が5%に増税され、翌年から120円(缶商品を中心に)に価格改定しました。
2000年	加温販売対応のPETボトル、ボトル缶が登場	ホット販売できるPETボトルを(株)伊藤園が販売しました。またPETボトルと同様にリキャップできる缶容器としてボトル缶も登場しました。
2005年	自販機耐震化技術研究会が発足	一般社団法人全国清涼飲料工業会、一般社団法人日本自動販売機工業会、日本自動販売協会、日本自動販売機保安整備協会の4団体で自販機据付の業界統一基準の策定を目的に「自販機耐震化技術研究会」を組織しました。3年間、さまざまな角度から研究を重ね新たな統一スタンダードとして、自動販売機据付基準を2007年にまとめました。自販機据付講習会と据付検定試験を2010年からスタートしています。
2005年	自販機の住所表示ステッカー貼り付け	携帯電話からの119番通報が増える中で、消防庁から業界に対して自販機に住所を表示する「住所表示ステッカー」の貼り付け要請があり、2004年大阪でのテスト展開を踏まえ、2005年1月10日(110番の日)から全国で貼り付けを行なっています。
2005年	省エネの優等生「ヒートポンプ方式」の自販機が登場	消費電力が従来機から大幅に削減できる新技術、ヒートポンプ方式の自販機の導入がはじまりました。消費電力削減に大きな貢献を果たしています。
2008年	清涼飲料自販機協議会を設立	一般社団法人全国清涼飲料工業会、一般社団法人日本自動販売機工業会、日本自動販売協会、日本自動販売機保安整備協会の4団体で清涼飲料自販機協議会を設立し、総消費電力量削減のために「自主行動計画」を策定。2009年度より2005年比で、短期(2005～2012年)37.1%減、中期(2013～2020年)50%減、長期(2021～2050年)60%減を目指して活動を展開。毎年6月に前年の成果を発表しています。2011年は短期目標(2012年が最終年度)を1年前倒して達成、39.9%の削減ができました。
2011年	東日本大震災でPETボトルのキャップ、業界統一で白無地化	3月11日の東日本大震災でキャップメーカーの工場が被災し、PETボトル用樹脂キャップの生産能力が大きく低下。震災後、清涼飲料水の需要が急速に高まり、清涼飲料メーカーとして最大の使命である商品の供給のため各清涼飲料会社共通の「白無地キャップ」に統一して、キャップの生産効率を上げ、商品の供給を確保しました(4月下旬から実施し、需給バランスが正常化した秋以降、通常に戻っています)
2012年		社団法人から一般社団法人全国清涼飲料工業会に名称変更

参考書籍 「日本清涼飲料史」(社団法人東京清涼飲料協会 現・東京都清涼飲料協同組合)、「東京都清涼飲料協同組合 100周年記念史」、「王冠の歴史」(日本王冠コルク工業連合会)、「ビジネスの生成 清涼飲料の日本化」(河野昭三 著)、「暮らしの中のガラスびん」GK道具研究所著 東洋ガラス(株)、「目で見る日本缶詰史」(社団法人日本缶詰協会)、「清涼飲料の常識」「清涼飲料水入門」(一般社団法人全国清涼飲料工業会)